

『莊嚴記』について

一、はじめに

『莊嚴記』の具名は「摧邪輪莊嚴記」といい、明恵房高弁（一一七三―一二三二、以下明恵）による撰述（一二一三）である。

本書は、『選択本願念仏集』（法然房源空（一一三三―一二二二）、一一九八、以下『選択集』）の批判書として著した『摧邪輪』（三巻、一二二二）において略して著さなかった内容をあらためてまとめ、『摧邪輪』での批判を補うことを目的として著されたものである。⁽¹⁾ このような理由から著された『莊嚴記』ではあるが、諸本の調査ならびに内容については『摧邪輪』に比べ未だまとまったものがない。⁽²⁾ そこで、本稿はこれらの二点について述べるものである。

二、諸本について

本書諸本の所蔵については、『お茶の水図書館蔵新修成實堂文庫善本書目』、『叡山文庫天海藏識語集成』⁽³⁾、『国書総目録』⁽⁴⁾、『鎌倉旧仏教』⁽⁵⁾等によれば次のとおりである。

【写本】 お茶の水図書館（鎌倉初期写、一帖）、仁和寺、天海蔵（叡山文庫）。

【版本】 寛永三年（一六二六）版 香川大、京大、他。

【活本】 『高僧名著全集』九、『浄土宗全書』八、『日本大藏経』華嚴宗章疏下。

この中、仁和寺所蔵本については『鎌倉旧仏教』に「仁和寺所蔵『摧邪輪』（三巻各由来を異とする取集本）巻下と殆ど同じ体裁の袋綴り冊子（墨付き二四丁）の『莊嚴記』があり、

米 澤 実江子

斎怡筆と思われるが、書写の奥書はない」と記されている。版本は先の目録等の記載の他に、大谷大学、大正大学、龍谷大学等に佛敎大学図書館所蔵寛永三年版^(?)と同版が蔵されている。

この度、(財)石川文化事業財団お茶の水図書館成實堂文庫(以下成實堂文庫)蔵本、叡山文庫天海蔵蔵本、佛敎大学図書館蔵寛永三年版について調査させて頂くことができたので、その結果について、成實堂文庫蔵本を底本として述べることにする。

〔1〕書誌概略(文中「」は底本における改行を示す。以下同)

成實堂文庫蔵本

【員数】一冊

【印記】「方便智院」(朱方印)

【法量】縦二六、二糎×横十五、四糎

【「界」】押界(界高、二二、二糎)

【題僉】なし

【外題】「莊嚴記」

【内題】「摧邪輪莊嚴記」

【尾題】「摧邪輪莊嚴記一卷」

【丁数】六九葉

【本文】全体一筆、訓点、注記。片面八行
【奥書】(裏表紙見返)

建曆三年六月廿二日 沙門高弁

於高尾寺別院梅尾住房草之了

この写本は、「方便智院」の朱方印を有することから、もと高山寺方便智院所蔵であったことがわかる。また『お茶の水図書館新成實堂文庫善本書目』には、「明恵自筆」と記されている。そこでこの写本に附されている見せけちに着目し、検討してみる。(行取りは底本に随った、()内は『浄土宗全書』八卷(以下『莊嚴記』の引用は『浄全』)の頁とその上下、他の訓点省略、太字は筆者による)

①十五丁オ(七七九頁下)

者豈此智證一切諸法悉皆平等而独自在
不等耶是故内自平等為皆平等而独自在
大涅槃外不失照名菩提智實性論中如光

②二七丁オ(七八四頁下)

唯惣說法住時分也云末法万年者約興
廢差別對證道以敎道為末法万年者約
興廢差別對證道以敎道為末於敎道中
取上品敎道不論下品敎道例如於正像中唯

③三〇丁ウ(七八六頁上)

也彼文也彼文一多對弁謂於一三千界中有多

①は、前行の「皆平等而独自在」を繰り返し書写したための見せけちであると考えられる。②は、見せけち直前の文字が「末」であることから、目移りによって前行の「法万年者約興廢差別對證道以教道為末」を繰り返し書写したものと考えられる。③もまた前の三文字である「也彼文」を繰り返し書写したための見せけちである。

これらの見せけちの状態からは、手元に原本があり、それを書写したために生じたものではないかと考えることができる。このことが肯首される場合、「明恵自筆」とされていることに再考の余地があると考えられる。⁽⁹⁾

叡山文庫天海藏蔵本

叡山文庫には以下の『莊嚴記』が蔵されている。

【写本】「天海藏」(10/39/210)和綴じ一部一冊

【刊本】「慈眼堂藏」袋綴じ一部一冊 寛永三年の刊記⁽¹⁰⁾

「真如藏」袋綴じ一部一冊 寛永三年の刊記⁽¹¹⁾

これら三部の中、刊本の二冊は、佛教大学蔵本と同版である。以下は「天海藏」所蔵の写本について示す。

【員数】一冊。【体裁】袋綴じ装【印記】遊紙ウ左下「山門蔵本」(黒方印)、一丁オ右下「天海藏」(黒方印)。「外題」摧邪

『莊嚴記』について

輪莊嚴記 全。【内題】摧邪輪莊嚴記一卷。【尾題】摧邪輪莊嚴記一卷。【題僉】なし。【法量】縦二一、三糎×横十八、七糎。【界】なし。【丁数】墨付き六十四丁(遊紙前後各一紙)、一面九行、一行十七文字、【奥書】なし。最終葉に「天海」(一六四三)署名、在判(方印)。

内容は、数箇所の誤字と、五十七丁オにおいて、一行前後している箇所が一箇所確認できる。返り点、連続付、送りがな等は、忠実に底本に依ったものか否かは不明である。

佛教大学蔵寛永三年版(極楽寺文庫/377)

【員数】一冊。【体裁】『摧邪輪』巻下と一具・袋綴じ装。【印記】なし。【題僉】巻下の刷り題僉(「摧邪輪 下」)の下方に墨書にて「莊嚴記入」とある。【法量】縦二六、七糎×横十八、〇糎。【内題】摧邪輪莊嚴記一卷。【尾題】摧邪輪莊嚴記一卷。【丁数】五一丁。【界】単界。一面十行、一行二十字。

【奥付】建暦三年六月廿二日沙門高辨/於高尾寺別院梅尾住房草之畢(本文と同版)

今茲一卷以、石水院經藏之本繕写之頗/可謂正本矣但如下愚小才何辨字画之訛/舛哉庶後見之輩使魯魚渾淆改正之者不/亦宜乎/時元和己未秋八月、日沙門通曉(異版)

為流通將來重加精校命工更刻之/安置梅尾山高尾寺觀海院/寛

永三年龍集良日（異版）

〔2〕校異による検討（校異の結果を示す場合、所蔵本の別は（一）内の表記とする）

成實堂文庫蔵本（成本）を底本とし、叡山文庫天海蔵蔵本（叡本）、佛敎大学図書館蔵寛永三年版（寛本）を校本として、注記を中心に検討を試みた。（以下、成本の該当箇所、（一）内は『浄全』の頁とその上下を示す）

①文字・語句の異なり（傍点筆者）

・四八丁ウ（七九三頁下）

成本・叡本「輪上文約加行差別」出二義不同「

寛本「輪上文約加行差別」出三義不同「

この一文は、「輪」すなわち『摧邪輪』における次の文を指す。

但約加行差別論其不同時有三念仏非観仏謂如愚鈍女人等称名念仏不観仏色相等故非観仏有称念義故立念仏名是故念仏義寛通観仏故観仏三昧経等以観仏身色相等名念仏三昧此例諸経論非一観仏義狭有不通観仏称名念仏義上故¹²⁾

「念仏」は、加行の段階において、その内容は異なるものの、仏の身色を観ずる観仏の義と、非観仏である称名の義とを

含むことから「寛い」意味があるとし、「観仏」は非観仏の称名は含まないので「狭い」意味であるとする。『莊嚴記』ではこの内容を指していることから、成本、叡本の「二義」が正しいと考えられる。

・四九丁オ（七九三頁下）

成本・叡本「観者観見是恵心所業」

寛本「観者観見是恵心所分末」

この一文は『摧邪輪』からの引用である。『摧邪輪』では「観者観見是恵心所業¹³⁾」となっていることから、成本、叡本が正しいと考えられる。

・四九丁オ（七九三頁下）

成本・叡本「断疑為業云々今所言」

寛本「断疑為業別今所言」

・五九丁ウ（七九八頁上）

成本・叡本「照触第十地職位菩薩」

寛本「照第十地職位菩薩」

以上のことから、成本によって、内容を明確に把握できる箇所が確認できる。又これらの他に、成本の「花」、「反」は寛本においては概ね「華」、「變」となっている。

②見せけち・訂正（『書誌概略』での三箇所を除く）

・七丁オ（七七六頁上）

二而不二也諸順第一義（「諸」左傍に見せけちし
右傍に「謂ク」）

叡本・寛本「二而不二也謂順大一義」

・十三丁オ（七七九頁上）

諸論諸説皆^{シヌ}（書損左傍に見せけちし界外に

「會」）

叡本・寛本「諸論諸説皆會」

・★十六丁ウ（七八〇頁下）

有差別異（「別」左傍に見せけちし

寛本「有差異」

・十六丁ウ（七八〇頁上）

此不同分事理（「同」左傍に見せけちし

叡本・寛本「此不分事理」

・十七丁オ（七八〇頁下）

難可^止一一、出之（「一」左傍に見せけちし

「一、」に改める）

叡本・寛本「一、」

・二一丁ウ（七八二頁下）

次五五百年鬪諍堅固（「五」左傍に見せけちし

「五百」に改める）

叡本・寛本「次五五百年鬪諍堅固」

・二五丁オ（七八四頁上）

七萬歳等時（「等」左傍に見せけちし

叡本・寛本「七萬歳時」

・二七丁ウ（七八四頁下）

万年後時法滅（「時」左傍に見せけちし

叡本・寛本「万年後法滅」

・三二丁ウ（七八七頁上）

九十九億應真士應八十不可説（「應」左傍に見せ

けちし

叡本・寛本「九十九億應真士八十不可説」

・四一丁ウ（七九〇頁下）

所引觀仏三昧經（「三昧」左傍に見せけちし

叡本・寛本「所引觀仏經」

・四四丁オ（七九一頁下）

又上句雙非云雙觀經（「雙」左傍に見せけちし

叡本・寛本「又上句非云雙觀經」

・四九丁オ（七九三頁下）

彼少彼兒戲論称名（「彼」左傍に見せけちし

叡本・寛本「彼少兒戲論称名」

・五一丁ウ（七九四頁下）

能^止能^{スル}通^{スル}衆行（「能^{スル}」左傍に見せけちし

「通^{スルカ}」に改める

叡本・寛本「能通^{スルカ}衆行」

・五二丁ウ（七九五頁上）

称名亦以可用之（「用」左傍に見せけちし、欄上に「同」と書す）

叡本・寛本「称名亦以可同之」

以上の見せけちでは、「一」「止」「ク」の三種が確認できる。

③挿入注記

・十丁オ（七七七頁下）

此一心惣説更無違^也。問発菩提心章（右傍に「也」）

叡本・寛本「此一心惣説更無違也問発菩提心章」

・十一丁ウ（七七八頁上）

如彼加行無念観等^可思之（右傍に「可」）

叡本・寛本「如彼加行無念観等可思之」

・十四丁オ（七七九頁下）

大乘法界無差別。説菩提心十二種義（左傍に「論^ニ」）

叡本・寛本「大乘法界無差別論説菩提心十二種義」

・二二丁ウ（七八二頁下）

仍云過千^五。百年後釈迦法（右傍に「五」）

叡本・寛本「仍云過千五百年後釈迦法」

・二五丁オ（七八三頁下）

於此能住。体雖有多門（欄上に「法」）

叡本・寛本「於此能住法体雖有多門」

・二六丁ウ（七八四頁上）

劣業所感過此時^也。論三時不同（右傍に「也」）

叡本・寛本「劣業所感過此時也論三時不同」

・二七丁オ（七八四頁下）

其^{輪文}釈。出之（原割注）（右傍に「輪文」）

叡本・寛本「其釈輪文出之」

・二八丁オ（七八五頁上）

應感与教。正法中（欄上に「例如」）

叡本・寛本「應感与教例如正法中」

・三四丁オ（七八七頁下）

雖有末法之言。如正像等說年限（欄脚に「末^ス」）

叡本・寛本「雖有末法之言未如正像等說年限」

・三八丁オ（七八九頁上）

唯出先滅之^一。言（右傍に「一」）

叡本・寛本「唯出先滅之一言」

・四三丁オ（七九一頁上）

十声十念為二十
加仏名為一法○仏名遍数者（左傍に「也若_シ加所_也」）
観本・寛本「十声十念為二十
加仏名為一法也若_シ加所_也仏名遍数者」

・五一丁オ（七九四頁下）

十地菩薩不離念_三○寶文等是也（右傍に「三」）
観本・寛本「十地菩薩不離念三寶（観本「宝」）
文等是也」

・五一丁オ（七九四頁下）

四等_{心ト}○者即四摂也（右傍に「心ト」）
観本・寛本「四等心者即四摂也」

・五二丁ウ（七九五頁上）

譬如有二人無道心之人_{一人}○誦誦法華（右傍に「一
人」）
観本・寛本「譬如有二人無道心之人一人誦誦法
華」

・五六丁ウ（七九七頁上）

非如地上證会真如_名○摂取（右傍に「名」）
観本・寛本「非如地上證会真如名摂取」

・五六丁ウ（七九七頁上）

多分以意業用為本然_{依ニ}○真言宗（左傍に「依ニ」）
観本・寛本「多分以意業用為本然依真言宗」

・六二丁オ（七九九頁下）

此_選○擇者兼摂取也（右傍に「選」）
観本・寛本「此選擇者兼摂取也」

④異本注記ならびにその他の注記

・三五丁オ（七八八頁上）

只出愚壞一分也_{其イ本}○得否碩徳（挿入注記し右傍に
「其イ本」）

観本・寛本「只出愚壞一分也其得否碩徳」

・四一丁ウ（七九〇頁下）

答日本願念仏行雙卷_観卷經中委既説之（右傍に
「観」）

観本・寛本「答日本願念仏行雙観經中委既説之」

・四二丁オ（七九一頁上）

汝集釈此文云言望仏本願者（右傍に「イ本无」）
観本・寛本「汝集釈此文云言望仏本願者」

・四二丁ウ（七九一頁上）

何者雙_{観イ}經発願文云（「雙」と「經」の間、右傍
に「観イ」）

観本・寛本「何者雙観經発願文云」

・★五二丁オ（七九五頁上）

凡諸文含与「奪竄」義（「竄」の左傍に見せけちし
右傍に「奪」止）

寛本「凡諸文含与奪義」

・六十丁オ（七九八頁下）

光明住因也果者イ本是現光也（挿入注記し左傍に「者

イ本」）

叡本・寛本「光明住因也果者是現光也」

墨の濃淡、筆致等から、③に挙げた挿入注記は概ね同筆と思われるが、④に挙げた注記は別筆と思われる。

〔3〕まとめ

以上、成本を底本として『莊嚴記』の字句の異同ならびに注記について考察してみた。成本における「見せけち」は、見せけちを施し、続けて文章を書いていることから、本書製作と同時のものと考えられる。また、「①文字・語句の異なり」においては、成本と叡本とが一致しており、寛本は異なっている。

〔②③④〕では★印を除いて叡本と寛本とが一致する。これらのことから、成本において「見せけち」「挿入注記」等を施した内容が、叡本寛本双方の底本の基になっていると考えられるが、①から、叡本と寛本の底本は、それぞれ別であったと考えられる。

成本は、先の書誌概略での考察において、その誤記のあり方から、著者自身が内容を考えながら書いた場合の誤記ではなく、手元に控えがあった上での目移りによる可能性が高いと考えられ、成本が明恵自筆とされていることには再考の余地があることを述べたが、注記等の考察から成本が『莊嚴記』諸本の原型であると考えられ、また奥田勲氏、金水敏氏の研究によって方便智院の室町期成立の目録に「摧邪輪莊嚴記」の書名が確認されており、¹³成本はこの「方便智院」の印記を有していることから、今回調査させていただいたものがそれに該当するものと考えられる。これらのことから、成本が「明恵自筆」の如何に関わらず貴重な書であることに変わりはないものと考ええる。

三、構成

『摧邪輪』ならびに『莊嚴記』における『選択集』批判の内容について、『莊嚴記』の序では以下のように述べる。

今就「此摧邪輪一部中所破過失」（中略）總計之有二十六種過二十三如「輪文出」之於「此記中」亦加三種「總為十六」（中略）（已上十三種過失中初六過本輪中立三大段「破」之後七過因「義便」散「破」之「臨」文可「見」今此記中加三種「者謂一「謬」解撰取不捨名義「過二以「念仏」名「本願」

而謬^二解觀經說不說^一過^三謬^二解十声十念義^一過^⑤

(〈〉原割注)

『摧邪輪』では十三の過失を挙げ、『莊嚴記』ではさらに三の過失を述べるとしている。そこで、先ず『摧邪輪』において述べたとする十三の過失を『莊嚴記』の内容と対応させ、次いで『莊嚴記』において述べる三の過失を列挙すると次のようになる。(番号は『莊嚴記』序における記載順、訓点省略)

『摧邪輪』

一 撥去菩提心過失(卷上)

一、①以菩提心不為往生極樂行過

弁定菩提心義

弁定二百一十億仏刹淨穢義

⑧云淨土有三惡趣過

⑨云從淨土沒墮穢土惡趣過

二、②言弥陀本願中無菩提心過

三、③以菩提心為有上小利過

四、④言双觀經不說菩提心并言弥陀一教止住時無菩提心

過(卷中)

五、⑤言菩提心抑念仏過

弁定念仏定散義

料簡觀經疏文

『莊嚴記』二二二

⑩執往生宗中觀仏三昧念仏三昧別体過

五余、⑪謬解光明遍照之經文過(卷下)

二 ⑥以聖道門警群賊過失此過者勸一言
陳下意許出之

⑦於群賊警中隱自過失過

⑫云仏果一切功德不及名号功德過

⑬能立一宗不成過

『莊嚴記』

⑭謬解撰取不捨名義過

⑮以念仏名本願而謬解觀經說不說過

⑯謬解十声十念義過也加此為十六過失

次に『莊嚴記』の構成を確認する。【問端】の下は『莊嚴記』に挙げる『摧邪輪』の文。()内は『鎌倉旧仏教』の頁とその上下)

一、題目義(『淨全』七七四頁下、以下同書の頁とその上下)

二、菩提心決中菩提心体性義(七七五頁下)。

所論は「弁定菩提心義」(三一九頁下)

三、第一門決中(七八一頁下)。

【問端】輪云問如^二此文下文^一云中品三人無^二菩提心^一故仏不^二来仰^一云云今何云^レ有^二菩提心^一乎答下文云不^レ發^二無上大菩提心^一不^レ簡^二小乘菩提心^一也云

(三二六頁上)

四、法住時分義（七八一頁下）

【問端】輪云若約「第二家説」從「万年」以後至「刀兵劫時」若約「第三家説」從「万年」以後至「七万歲時」也云云（三四二頁上）

五、法滅時菩提心經住不住義（七八八頁下）

【問端】輪云但此義不「必定執」若非「道理」者且為「對」汝非理執「我亦致中非理難」云云（三五一頁下）

六、第五門決定散章中（七八九頁下）

【問端】輪云是故觀經疏第四散善義云五從「若念佛者」下至乃得レ為「比類」云云（三五三頁上）

七、第五門決定散章中念仏三昧余行兼不兼義（七九〇頁上）

【問端】或於「念仏行中」有「兼」誦誦大乘等余行「如」觀仏三昧經第十云「等」云云（三五七頁上）

八、料簡疏文章中念仏三昧觀仏三昧同異義（七九〇頁下）。

所論は「菩提心言」抑「念仏」過（三五八頁上）

九、撰取不捨義（七九四頁上）

【問端】輪云望「地上菩薩識所變浄土」諸境雖「通」有漏無漏「今善導意且拏」無漏義辺「無漏義亦雖」通「心境」善導意亦取「無漏心心所法」（三七〇頁下）

十、人空理中五蘊空義（八〇一頁下）

【問端】輪云人空理中五蘊皆空云云（三七三頁下）

以上の十箇が『莊嚴記』に挙げる項目と問端である。これらは一は題目、二と三は「第一の過失」での「弁定菩提心義」、四と五は「第四の過失」での「經道滅尽」、六・七・八は「第五の過失」での「念仏三昧觀仏三昧」、九は「第五の余の過失」、十は「菩提心を撥去する過失」のまとめの内、等について再論するものである。また本書において述べるとする三つの過失（⑭⑮⑯）の内、⑭は九の「撰取不捨義」において、⑮⑯は八の「料簡疏文章中念仏三昧觀仏三昧同異義」において論じられており、批判項目として挙げられていない。このことは、前の序に

十三種過失中初六過本輪中立「大段」破之後七過因「義便」散「破之」

と、『摧邪輪』で述べる十三の過失の内、後の七の過失は大段を立てずに「義便によって散破」したと述べるのと同様に『莊嚴記』の文中において散破される形式を取るものである。

以上のことから、『莊嚴記』では『摧邪輪』の「題目」と、「大文第一、菩提心を撥去する過失」の中、第一、第四、第五、第五の余、等を論じており、「大文第二、聖道門を群賊に喩える過失」については論じていないことがわかる。

四、内容概観

〔題目義〕

ここでは『摧邪輪』の具名である「於一向専修宗選択集中摧邪輪」の中に、批判の対象である『選択集』の名を入れた理由について、『選択集』と簡別する為であるとし、また智儼の書の題名を挙げることによって、このような題目の例は特別のことではないことを示す。

〔菩提心決中菩提心体性義〕

菩提心体性義は、『摧邪輪』の、第一の過「以菩提心不_レ為往生極樂行_一過」の初めに「先須_三弁定菩提心義_一」として論じられる内容で、そこでは、次の十一の典籍が引用される。

①善導『觀經疏』『序文義』。②元曉『遊心安樂道』。③表公『華嚴經文義要決問答』(取意)。④善導『觀經疏』『序文義』(①とは別所)。⑤道綽『安樂集』。⑥世親『無量壽經論』(取意)。⑦世親『十地經論』(内容指摘)。⑧世親『發菩提心經論』。⑨蓮華藏菩薩『広積菩提心論』。⑩馬鳴『大乘起信論』。⑪世親『仏性論』(取意)。⑫龍樹『菩提心離相論』。

この内、①と②は共に菩提心の行相について述べていることを示すものである。③を以て「浄土家の発心は縁発心である」

とし、④⑤⑥は③の文証として引用されるものである。⑦は「此菩提心為_下於_三諸教_一有_中差別_上乎_三」との設問に対する答として「三乗行者於_三三乘菩提_一起_三希求心_一隨_三其三根差別_一出_三三種菩提_一(中略)雖有_三分位不同_一其心体無_三差別_一也_三」とする文証として引用されるものであり、⑧⑨⑩は⑦(菩提心体無差別義)に対して「諸宗釈文不同」という反問としての引用である。このように文証、反問等の形を取りながら多様な解釈を挙げ、結論として⑪『仏性論』の「三種仏菩提」、⑫『菩提心離相論』の「法無我平等自身本来不生自性空故」等を⑦の文証として引用して「与_三法無我理_一相応心指_レ此云_三菩提心_一」「諸教菩提心其体性無_三差別_一也_三」等と、菩提心の体性を定義する。⁽³⁴⁾

『莊嚴記』では、『摧邪輪』において菩提心の体性をこのように定義した理由を

此決中所_三以明_三菩提心体無差別義_一者世間淺識男女等聞_三教文不同淺深差別_一執_三心体各別義_一⁽³⁵⁾

理解の浅い衆生は「經文の不同」に執われ、それぞれの文によって菩提心の体に差別があるものと誤った理解をしてしまうからであると述べる。また

此心無_三差別_一通_三一切諸仏法_一以為_三命根_一⁽³⁶⁾

菩提心は一切諸仏の法を通じて命根であるとし、一方で「頭_三其体_一教門不同諸義差別_一」するものであるとして、教えの説き

方においては不同があるとする。このように「菩提心体無差別」とし、一方で「教文不同」と述べることにについて、先ず菩提心の「一心総説」の文証として『法界無差別論』⁽³⁸⁾『菩提心離相論』⁽³⁹⁾『仏性論』⁽⁴⁰⁾等を挙げ、次に「別説」の文証として智儼の『孔目章』⁽⁴¹⁾「賢首品所立発菩提心章」の「体性者随義不同略有三種」一相発二息相発三眞発の文を引用して「随一発心浅深二分始中終不同」⁽⁴²⁾一つことを示す。

このように示すことは、教文には、『菩提心離相論』等のように菩提心の体を論じる内容と、『孔目章』のように「発門」すなわち衆生の機根に相応した発心について論じる内容等があることを示すものである。

以上のことから、『摧邪輪』の「弁定菩提心義」では教門における「別説」として『観経疏』、『遊心安楽道』、『安樂集』等を挙げ、「総説」として『菩提心離相論』によって、菩提心体の無差別を示し、『莊嚴記』では「発門」（衆生の機根の差別、『孔目章』）を示すことによって、教文が多様に説かれることを示す。⁽⁴³⁾

〔第一文決中〕

ここでは『摧邪輪』第一の過において『釈浄土群疑論』（以下、『群疑論』）での「中品下生仏不來迎」⁽⁴⁴⁾の理由について、

下文云不_レ発_二無上大菩提心_一不_レ簡_二小乘菩提心_一也⁽⁴⁵⁾
『群疑論』の「中品の三人は無上の大菩提心を発さず、小乗の菩提心を簡（へだて）なかった」とする文を示したことについて述べるものである。

『莊嚴記』では「仏不來迎」について

先発_二大心_一薰_二成種子_一後時退_レ心不_レ起_二現行_一由_下先発_二大心_一種子不_レ失故得_二作_レ因往生_一⁽⁴⁶⁾

先ず大心を発してその種子を薰じれば、後に退心して大乘の行を行わない者でも、大心の種子を失わないことで、往生の因となる、とする。

『群疑論』では「中品下生仏不來迎」の前に

中品三人退_二大乘心_一発_二小乘意_一退_二大乘行_一修_二小乘行_一⁽⁴⁷⁾

中品の三人は大乘の心と行とをを退し、小乗の意を発し小乗の行を修す、とあることから、『莊嚴記』ではこの内容をふまえて『摧邪輪』の説示を説明していると考えられる。「大心」とは大乘の菩提心のことであり、大乘と小乗とを峻別することを示す。

〔法住時分義〕

ここでは『摧邪輪』第四の過「破_下云_二双観経不_レ説_二菩提心_一并云_二弥陀一教止住時無_二菩提心_一過_上」における「経道減尽」

について述べる。

『摧邪輪』では「発心の因縁」の例として、釈尊が因位において地獄の衆生であった時、地獄において発心したという『大方便仏報恩経』の本事譚を引用して

此則釈尊為_二罪人_一之昔見_二衆生苦_一發_二菩提心_一有_二慈悲_一人皆以可_レ同_レ之⁽⁴⁸⁾

慈悲心があれば、地獄での発心も可能であることを述べ、他にも多くの經典を引用して「発心の因縁」が多種多様であることを示す。また

若有_二発心_一者聞法得道亦不_レ疑是故止住百歳等文亦約_二經道興廢_一一途説也更非_レ謂_二約_一人機_一無_中如_レ此諸門_上也⁽⁴⁹⁾

「止住百歳」とは經道の興廢という観点から述べる一つの解釈であり、様々な衆生の機根を考えれば教門がなくなることはないとする。

「発心の因縁」については多くの經典を引用して詳細に論じるのであるが、これに比べて、「經道滅尽」について引用される典籍は懷感の『群疑論』、善導の『往生礼讃』、環興の『無量寿經連義述文贊』、道綽の『安樂集』の四書のみである。このことから『摧邪輪』では「発心の因縁」が多様に存在することを示すことに重点をおいたものと考えられる。

『莊嚴記』では「法住時分義」のはじめに

『莊嚴記』について

今案_二此法住義_一總有_二二門_一一別説三時門二總説法住門然此二門始終無_二相違_一也⁽⁵⁰⁾

法住の義には別説三時門と總説法住門とがあり、この二門は矛盾することはないとし、別説三時門は、諸門に不同はあっても皆同じく盛衰不同という観点から始中終の義を立てたものである⁽⁵¹⁾、總説法住門は不可思議なる因縁業力によって常住すると述べる。⁽⁵²⁾

『摧邪輪』において「発心の因縁」の多様性を示すことを中心に論じたことは、発心の可能性を限定することを批判したものと考えられる。しかし『莊嚴記』では「発心の因縁」を示すための典籍は引用されず、もっぱら「經道滅尽」に対する諸師の異説を示す為に多くの典籍が引用される。このことは、前の「菩提心体性義」と同じく、法住義に「總説」と「別説」があり、さらにその別説を詳説することによって、解釈を一つに限定することを批判するものであると考えられる。

「法滅時菩提心經住不住義」

ここでは『摧邪輪』の次の内容について述べる。

輪云但此義不_二必定執_一若非_二道理_一者且為對_二汝非理執_一我亦致_二非理難_一⁽⁵³⁾

ここにいう「此義」とは、『摧邪輪』において『無量寿經』

の「特留此經」の義を「阿弥陀仏の願力によって『無量寿經』が末世に留まるのは、阿弥陀仏の教えが留まるということであり、他の經典についていうものではない」とした内容を指し『摧邪輪』では続けて「汝（法然）の誤った執着に対し、我（明恵）も道理に外れたことを言っただけである」とした。『莊嚴記』ではこの後半部分について述べる。

『摧邪輪』では『出生菩提心經』を引用し、釈迦が因位において經典を学び、その善業によって末世に『出生菩提心經』を得たこと、薄福の衆生が生死流転の中において阿弥陀仏の願力によって、『出生菩提心經』を得たこと、また阿弥陀仏の願力によって末世に『出生菩提心經』が顯揚する等のことを示す。『莊嚴記』では、先ず『摧邪輪』での『出生菩提心經』の引用文について、

如於「彼後末世」執持在「其手」之文者若我為隨「仏而學者遂」末法值遇「平憑」斯由阿弥陀願力如是果之文「者若我為如願而信者起」無上道心⁽⁵⁷⁾

「彼の後の末世に於て執持して其の手に在り」というのは、仏に随つて学べば末世で（經典に）値遇することをいい、「阿弥陀仏の願力に由り、是の如く果る」というのは、阿弥陀の願を信じれば無上の道心を起こす、と解釈することを示し、その上で法然の解釈に対して

汝失「釈文之方軌」唯出「先滅之一言」以此為「所以」撥「無菩提心」

釈文の方軌を失し「先滅」の一言のみに執着して菩提心を廃するものであるとし、また

菩提心發起之因縁隨事無量（中略）言論往復章段繁広一經文義隨分勘「註之」住滅両義碩徳可「定」説之「而已」⁽⁵⁹⁾

發菩提心の因縁は無量であり、解釈も多種多様であつて、經文は各衆生に相應するよう考えられ記録されたものである、と批判する。

先にみたように、明恵は、法滅も發起の一因縁としており、また仏道同であつて、阿弥陀一仏も諸仏も同等であり、それぞれの願は一切衆生の一々に相應させるためのものである、という立場から『出生菩提心經』の解釈を示し、『無量寿經』の「特留此經」の文によって阿弥陀仏の教えが末世に留まるといふことは、諸仏の教えも留まるとする。こうして「正論」を述べること、『摧邪輪』での「此義」がどのように「非理難」であつたかを示すものである。

〔第五門決定散章中〕

ここでは『摧邪輪』の次の文を挙げる。

輪云是故觀經疏第四散善義云五從「若念仏者」下至「得」為「比

類云云本論文具此中既於「散善義中」立「三昧名」此約「善体」立「名也」⁽⁶⁰⁾

『摧邪輪』では『觀經疏』散善義の文を挙げて「散善義の中に三昧の名を立てるのは善行の体から散善の行について述べるものである」とし、散善の行は

約「人位」取「之終不」發「定心」故撰「散善中」也⁽⁶¹⁾
定心を發することができない者の行であるとする。

『莊嚴記』では、『觀經疏』の定善・散善の二義は「正宗分」であるが、『摧邪輪』で散善義に念仏三昧の名を立てる文証として引用する『觀經疏』の文は「流通分」の文であると指摘した上で、この箇所を散善義を示す文として文証に引用したことを説明する。

觀「疏意」有「二流通義」謂以「經行此三昧者乃至何況憶念文」為「定善流通」是故疏釈「此文」中云「一明下總標「定善」以立中三昧之名」等云云次輪文所引即散善流通文也隣「次上定善流通文」此文來是故於「当疏中」設余処所「言念仏三昧名言雖有「定散之濫」於「散善称名」立「三昧名」此解釋殊明白也」⁽⁶²⁾

『觀經疏』流通分には定善流通義と散善流通義の二つがあり、定善流通義は『觀經疏』において『觀經』の「行此三昧」者現身得「見」無量壽仏及「二大士」若善男子及善女人但聞「仏名」二菩薩名「除」無量劫生死之罪「何況憶念」⁽⁶³⁾の文を積すのに四つ

の意義があるとする中の第一を「一明下總標定善以立中三昧之名」とすることから、『觀經』のこの文を指すとする。次に散善流通義は『觀經疏』において『觀經』の「若念仏者当知此人即是人中芬陀利花觀世音菩薩大勢至菩薩為「其勝友」当坐「道場」生「諸仏家」の文を「正顯」念仏三昧功能超絶実非「雜善得」為「比類」と積す箇所であるとする。『觀經疏』には前の文には「定善」の語があつて、後の文には「散善」の語はないが、この二つの文は並んで述べられていることから、先の文が「定善流通義」で、これに続く文が「散善流通義」であることは明らかであり、よって流通分を散善義の文証として引用することに問題はないとする。

〔第五門決定散章中念仏三昧余行兼不兼義〕

ここでは『摧邪輪』の次の文を挙げる。

輪云於「念仏行中」有「兼」讀誦大乘等余行「如」觀仏三昧經第十云「⁽⁶⁴⁾

これは、善導が念仏三昧の行儀として称名の一行を勧めるのは、「一類の称名の行者の為に一つの方法を示す」ものであるが、一方、総ての行者についていうのであれば、讀誦大乘、持戒等の諸縁を具足することによっても念仏三昧が成就されるものであるということを『觀仏三昧經』を文証に述べ、「総」と

「別」の観点から、善導の解釈を別説の一つであるとした文の(66)一部である。

『莊嚴記』では

於「諸行中」念仏三昧殊具持戒等諸緣成「就之」也何者謂余三昧値「遇解行二友」修禪支分具足發「近分根本禪」皆有「成就之軌儀」又或有「發禪未」必云「見仏聞法」此称名三昧唯以「淨心称名方便」直發「三昧」見仏聞法殊制「犯戒見慢等過」可「為支分」也如「彼依」未至定「得初二果」等上者入觀時雖「不起」染心「居家聖者出觀時有」自妻等愛染「今称名三昧尚可」超「過此」一向專修百即百生義是得「成立」(67)

念仏三昧は持戒等の諸縁を具足することによって成就するものであり、他の三昧においてもそれぞれに「成就の軌儀」があるとする。また在家の行者においては禪を發しても見仏聞法できない場合があるが、称名三昧は淨心称名方便を以て犯戒見慢等を制することによって三昧を發して見仏聞法することができ、また軌儀をふまえた称名三昧は百即百生するのであるから、未至定（初禪定を得るための準備的修行）に依って得る初二果(68)を超過するものであるとする。

このように、三昧には成就の軌儀があり、三昧の状態には「近分定」「根本定」等があり、また行者にも「初二果」という「位」を示すことによって、修行の段階があることを示すこと

によって、善導の所説が「一類の行者」「一つの方法」を説くもの、すなわち別説の一つであるとした『摧邪輪』の解釈の妥当性を示すものであると考えられる。

〔料簡疏文中念仏三昧觀仏三昧同異義〕

ここでは、『觀經疏』に説かれる「念仏三昧」と「觀仏三昧」の両三昧における同義と異義について述べる。

①「同義」について

『摧邪輪』では觀の成就はすなわち念の成就であり、「觀仏三昧と念仏三昧とは異体無し」とし、また「觀見」すなわち「見る」というのは、心（意識）と眼根（視覚能力）とに因るものである(69)ので、念と觀とは一心であり、この意味において「同義」であるとする(70)。

『莊嚴記』では、『選択集』第十二章において「本願の念仏行は『無量壽經』に詳説するので『觀經』では重説しない」とする内容を批判することによって、念仏三昧と觀仏三昧との同義について述べる。

先ず『觀經疏』について、

善導釈「觀經持無量壽仏名付属文」云望仏本願等(71)云云
此文「云言」望仏本願「者指」双觀經四十八願中第十八願「也」云云
爾者說雖「不」説「發願義」若說「念仏」者望「双觀經」即是本

願念仏也汝何可云觀經不三重説乎⁽⁷²⁾

『觀經疏』では『觀經』の「持無量寿仏名」を「望仏本願」として『無量寿經』の本願に依て解釈していることから、『觀經』の「持無量寿仏名」とは『無量寿經』第十八願に説かれる念仏のことであり、同じく「称南無阿弥陀仏」は『無量寿經』の本願の念仏を指しているとする。

次に、『無量寿經』第十八願の「乃至十念」を善導が「十声」と解釈することについて、

解曰此文委細説称名義何者謂能所合論称名惣有三法一念二声三仏名也（中略）今以二仏名爲二一法故今言二十念一者其法体即二十一法^{（十念爲二十）}也若加三所念仏名遍數一者即爲三十法一也^{（念聲名三法具足義出法位師解説）}

明恵は「称名の位には必ず心念有り。十声というは声を挙げ、必ず心念に撰す也⁽⁷⁴⁾」という立場から、称名には、念・声・仏名の三の法があり、「十声」には十の念法と十の声法と仏名の一法とで二十一法があるとする。⁽⁷⁵⁾この解釈を基に、善導が『無量寿經』の「十念」を「十声」と解釈するのは、「乃至十念称南無阿弥陀仏」に二十一の法が含まれていることを示すものであり、よって『無量寿經』の「十念」の一句をより詳細に解釈するものであるとして、『觀經』においては本願の念仏を詳細に説くものであるとして、先の『選択集』の解釈を批判す

る。このように、念・声・仏にそれぞれ法があることを示し、念と声とを各別に捉える立場は『選択集』第三章における「念声は一」の解釈に対する批判へと展開する。⁽⁷⁶⁾

念者は心所声者是色色色既異何爲一体乎⁽⁷⁷⁾

念とは心所⁽⁷⁸⁾であり、声とは色であるので「念声は一」と解釈することはできないとした上で、『選択集』において「念声は一」の文証として引用した懷感の『群疑論』について次のように述べる。

勘^レ汝所^レ引感師解説群疑論第七釈^三出声称名爲^三心念成就方便^一処云故觀經言是人苦逼不^レ違^三念仏^一善友教令^三可称^一南無阿弥陀仏一如^レ是至^レ心令^三声不^レ絶豈非^下苦惱所^レ逼念想難^レ成令^三声不絶至心便得^上今此出^レ声学^三念仏定^一亦復如是令声不^レ絶遂得^三三昧^一見^三仏聖衆^一（白十交）然目前故（中略）念想爲^三自性^一称名爲^三資糧^一（中略）爲^三声念格別証^{（80）}

『群疑論』で「今声に出して念仏定を学るのは、絶えず声に出すことで仏と聖衆と見ることができるといふのは、称名の相統は心念成就の方便、換言すれば、念想は自性、称名は資糧と解釈した上での文であるので、『選択集』でいうような「念声は一」の文証にはならないとする。『群疑論』のこの文は、三昧の境地（心念成就）に至って見仏（觀仏）する、とあるの

で念仏三昧、観仏三昧の「同義」としての文証でもある。

ここでの批判は、『莊嚴記』において新たに加える三種の過失の内、「⑮以念仏一名本願而謬解觀經說不説過」ならびに「⑯謬解十声十念義過」を含む。

②「異義」について

『摧邪輪』では、観仏は観見（慧の心作用）であり、仏の色相に約し、念仏は憶念（忘れないという心作用）であり、広く諸法に通ずるものであるという点で異義であるとする。これは、人位ならびに加行位の異なりから論じるもので、「念仏」は各位の異なりに関わらず、称名から観仏まで通じていることから寛の義とし、「観仏」は称名の段階では顕現しないので狭の義であるとする⁽⁸¹⁾。

『莊嚴記』では『摧邪輪』の説示をふまえて、

総説二種三昧有二名一無二体一於其加行位一有「寛狭義」約此差別一釈「観念二字」以配「念慧心所」也⁽⁸²⁾

念仏三昧と観仏三昧とは別体ではないが、加行位における観と念には寛狭の差別があり、これによって観・念の二字を慧の心所と念の心所に配したとする。

また『摧邪輪』において「如愚鈍女人等称名念仏不観仏色相等」故非「観仏」有「称念義」故立「念仏名」というように「愚鈍女人の称名念仏」という一類を挙げたことについて、

『莊嚴記』では、念と慧の心所について種々の解釈（「宗家」の「別」とする説、唯識家の「不必俱起」の説、小乗の「遍三性心」の説、大乘有論師の「五心所必俱起」の説）を挙げ、さらに『成唯識論』において「習定愚鈍人」に対して論じる箇所を示すことによって、『摧邪輪』の説も特殊な例法ではないことを示す。また『成唯識論』での論法を示しつつも、内容に至っては、『成唯識論』の「習定愚鈍人」と『摧邪輪』での「愚鈍女人（散位称名愚鈍人）」とは行者の能力不同によって行の果にも異なりが生じるとする⁽⁸⁵⁾。

このように「観」とは慧の用らきによって所観の境を簡択した上での「觀察の義」であり、「念」とは念の用らきによって曾て所受した境を忘れないという「憶念の義」であるので、観と念とは「異義」であるとし、また加行の各位の異なりに相応するものであるとする。

「撰取不捨義」

『摧邪輪』「第五門決の余」では『選択集』第七章ならびに「撰取不捨曼荼羅」に対して「念仏衆生撰取不捨」の文は、称名の行者に限らず観仏等の行者も撰取を蒙るとして批判する。

『莊嚴記』では次の点から批判する。

①「惣じて念仏の義を料簡す」として『菩提資糧論』を文証

に、念仏には「自性念仏」と「資糧念仏」の二種があることを示し、⁽⁹⁰⁾「自性念仏」とは『観無量寿経』の「真身観」をはじめ諸宗の念仏による観行のことであり、「資糧念仏」とは正見と相応して仏に帰依する一切の善のことであって、称名行はこの資糧念仏に含まれるとする。⁽⁹¹⁾またこのような解釈は念仏宗においても同様であり。⁽⁹²⁾

此二種念仏別説有「浅深差別」通説為「一念仏」自性念仏と資糧念仏は、行相等の浅深の差別によって別説するが、総じては一つの念仏であるとする。そしてこのような解釈を示した上で

主伴相從而取之皆為「一念仏三昧」撰「取称名浅行人」者倍撰「取深念行者」理在絶言也⁽⁹³⁾

一つの念仏として、称名の浅行人を撰取するのであるから、深念の行者を撰取するのは当然のことであるとする。

②『摧邪輪』の次の文について解釈を示す。

輪云望「地上菩薩識所変」浄土諸境雖「通」有漏無漏「今善導意且」拳「無漏義辺」無漏義亦雖「通」心境「善導意亦取」無漏心所法⁽⁹⁴⁾

此の文は、専修人の「心光は身光の体である」という立場⁽⁹⁵⁾から明恵の身光（光明遍照十方世界）と心光（念仏衆生撰取不捨）とは異なるとする解釈への反問の一部である。

『摧邪輪』ではこの反問に対して『観経』第九「真身観」を文証として、身光が十方の衆生を照らすのは阿弥陀仏の大悲の徳を顕し、心光が専念の行者を撰取するのは阿弥陀仏とこの行者との感応によるものであると解釈すべきであり、善導も同じ解釈であるとする。⁽⁹⁶⁾

『莊嚴記』では先の専修人の問いの中、「今善導意且」拳「無漏義辺」と「無漏心所」の二文について述べる。

②―「且」拳「無漏義辺」について

解日善導疏上下文顯「浄土依正」多唯明「無漏義」故是以疏釈「地下莊嚴」中云「一明」幢体等は無漏金剛^{云云}又釈「池渠観」中云言「金剛」者即是無漏之体也等^{云云}此等皆約「果徳」且「拳」無漏義辺「不」尽「諸門」也又釈「度苦衆生經文」中云「浄土之中一切聖人皆以」無漏「為」体大悲為「用」畢竟常住離「於分段之生滅」^{云云}（中略）此亦未「尽」諸門「也」（中略）謂依「善導意」九品生人一向為「凡夫」往生極樂後亦升「勝進階降」⁽⁹⁷⁾

善導は『観経疏』において、仏の依正は、その多くが無漏であることを明かしているとする。依報には地下莊嚴、池渠観等の例を挙げ、これらは「果徳に約した」解釈であるとし、正報では浄土の聖人について「分段生死を離れる」ことのみを述べている点を挙げ、これによって善導の解釈は「諸門を尽くす解釈ではない」とし、さらに善導は「九品皆凡」とすることか

ら、凡夫の為の一つの解釈を述べるものであって、往生極楽の後に勝進階降があることを弁えた解釈であるとする。

②「無漏心心所」について

言「無漏心心所」者如次配「弥陀心光勢至智光」（中略）弥陀果満位是覚王故配「心王」勢至居因地是補佐故配「心所」（中略）故云取「無漏心心所法」等也可思之⁽⁹⁸⁾

無漏の心（心王）は弥陀（覚王）の心光に、無漏の心所は勢至（因地の菩薩）の智光にそれぞれ配すとし、「善導の意も亦無漏の心心所の法を取る」とするのは、このような解釈に依るものであるとする。

以上の二点から、『摧邪輪』では「心光」と「身光」の解釈について述べたのに対し、『莊嚴記』では「善導の解釈」は多様な解釈のうちの一つを述べるものであることを示す。

③『摧邪輪』の次の文について解釈を示す。

輪云仏地色心俱雖尊高慈念功德約「意業」故攝取不捨之言全不関「身光」⁽⁹⁹⁾

これは、前の「専修人の問い」に対する答であり、『莊嚴記』において述べる「⑭謬「解攝取不捨名義」過」にあたる。

③―一、「摂取の義」について

『摧邪輪』では、心光摂取について「念仏を先とするのは、仏名を称えても仏を念じることがなければ往生することはでき

ない⁽¹⁰⁰⁾」とし、摂取とは「念」、すなわち意業による摂取であるとした。また善導の「三縁の義」もこれに准じて知るべきであるとする。

『莊嚴記』では随義不同であるとして、『摧邪輪』では「証得の義」「感応の義」「撰（持）の義」等を述べたことをいい、『莊嚴記』ではさらに「願行獲得の義」「受化の義」「随順の義」を挙げる⁽¹⁰¹⁾。

③―二、『選択集』第七章章題「弥陀光明不照余行者」唯攝取念仏行者⁽¹⁰²⁾」について

ここでは『華嚴経』から、三つの内容を教証として引用し、『選択集』における矛盾を示す⁽¹⁰³⁾。

i 「仏の因位（十地菩薩）における身光は、諸大地獄の衆生から十方の菩薩に至るまで遍く照らす⁽¹⁰⁴⁾」のであるから、果位（仏）に至った後に身光によって照らさない衆生があるということはない。

ii 「十地満時の菩薩は、十方一切の諸仏の照触を受けて成仏する⁽¹⁰⁵⁾」のであるから、阿弥陀一仏のみが念仏宗以外の菩薩を照らさないということはない。

iii 「衆生が五塵煩惱を息め、仏の教えを求めるのは、光明の用きによる⁽¹⁰⁶⁾」のである。

すなわち、諸仏道同の仏事において、阿弥陀仏一仏のみが例

外ではないとし、称名の行者のみを照らす「摂取不捨曼荼羅」を批判する。

「摂取不捨」の解釈について、『摧邪輪』では主に光明の意義（心光と身光の理解）、摂取の対象となる行（称名に限定しない念仏善）、善導の解釈等について述べたが、『莊嚴記』では、光明の照觸・摂取の主体である仏について述べる。

③「選択」と「摂取」について

ここでは『選択集』第三章の文を挙げる。

此中選択者即是取捨義也（中略）双卷經意亦有「選択義」

謂云「摂取二百一十億諸仏妙土清淨之行是也選択与摂取

其言雖異其意是同然者捨不_レ清淨行取_二清淨之行_一也」⁽¹²⁾

『選択集』では「選択とは取捨の義」といい、また「選択と摂取とは同意」という。これに対して『莊嚴記』では次のようにいう。

若如「此解釈」者摂取者即是取捨義也然經文既云「念仏衆生

摂取不捨不_レ雜余衆生」然摂取若為「取捨義」者於「念仏

衆生中」取_二何衆生捨_二何衆生_一乎⁽¹³⁾

『選択集』の解釈では、「摂取」と「取捨」とが同義ということになり、「念仏衆生摂取不捨」の文は、念仏の衆生の中にも摂取される者と取捨される者とが生じることになると批判し、さらに

釈「大阿弥陀經文」可_レ言此選択者兼「摂取」也釈「双觀經文」

可_レ言此摂取者兼「選択」也兩經文互顯「二義」也更不_レ可_レ

云「選択與「摂取」其言雖異其意是同也（中略）大阿弥陀

經云選_二択心中所願_一等双觀經云其心寂靜志無_二所着_一乃至

具_二足五劫思惟_一摂取等故爾者此選択者簡択義摂取者摂持

義也於「心心所中」是別境五中惠念心所也（中略）集所引

大阿弥陀經文總通「二百一十億仏刹」故起「惠選_二択其勝劣_一

必有_レ念可_レ摂_二其妙土_一也双觀經文別局「諸仏妙土中勝行」

故起_レ念摂_二取之_一也故文云「清淨之行」是故選択義寬通_二

二百一十億」故摂取義狹属「清淨行故」^(但約此仏刹義作通局對也)

『大阿弥陀經』ならびに『無量壽經』の文は、ともに選択と摂

取とを兼ねるもので、また『大阿弥陀經』では「心中の所願を

選択」することから、この選択は簡択の義、すなわち慧の心所

であるとし、『無量壽經』では「五劫思惟して摂取」すること

から、この摂取は摂持の義、すなわち念の心所であるとする。

このように「選択」と「摂取」とは同義ではないので、「選択

と摂取は同意である」ということはできないという批判である。

「人空理中五蘊空義」

ここでは『摧邪輪』の次の文を挙げる。

人空理中五蘊空⁽¹⁵⁾

『莊嚴記』では、この文について澄観の『五蘊観門』⁽¹⁶⁾を文証として次のように述べる。

大乘中説⁽¹⁷⁾法空⁽¹⁸⁾時五蘊法皆空我執何住是故依⁽¹⁹⁾大乘実義⁽²⁰⁾人空理中五蘊法皆空也然汝之所執始終違⁽²¹⁾背此道理⁽²²⁾是故以為⁽²³⁾性有心⁽²⁴⁾也

人法ともに空である大乘の理りにおいて五蘊皆空であるにも関わらず、法然の執着はこの道理に違うものである、として、法然に対して性有心であると批判する。常に大乘と小乗とを峻別した立場の批判である。

五、構成と内容のまとめ

『莊嚴記』では「撰取不捨義」の最後に「釈文の方軌」について述べる。

汝未⁽²⁵⁾知⁽²⁶⁾釈文方軌⁽²⁷⁾夫対⁽²⁸⁾文先歴⁽²⁹⁾權実⁽³⁰⁾探⁽³¹⁾義両教俱有判⁽³²⁾浅深⁽³³⁾二宗有無定⁽³⁴⁾半滿⁽³⁵⁾（中略）三乗教之分説は一乗海之一諦也是故一經文義悉含⁽³⁶⁾諸乘法門⁽³⁷⁾各随⁽³⁸⁾機悟入皆為⁽³⁹⁾甘露要門⁽⁴⁰⁾是名⁽⁴¹⁾無障無碍法界法門⁽⁴²⁾

先ず、教文について權教と実教とを区別し、義を探り、両教共に在ればその内容の浅深を判じ、二宗の有無においては声聞

藏教と菩薩藏教とを定める等と示し、最終的に、三乗の分説は一乗海の一滴であり、一つの經文の義は諸乗の法門を含み、衆生の機に即して悟入する為の甘露の要文であると述べる。これは明恵の仏教観を端的に示すものである。

『摧邪輪』では多くの典籍を引用し、その解釈を以て、『選択集』は經文を誤解し、また善導の意にも反しているということ⁽⁴³⁾を立証することで『選択集』を批判する。『莊嚴記』でも同様に、多数の典籍を引用するが、その引用態度は『摧邪輪』での説示を、『摧邪輪』と同じ視点から補足するものではなく、異なった視点から、典籍を論証として引用し、しかも大乘仏教として相反しないことを示すものである。⁽⁴⁴⁾このことから、『摧邪輪』と『莊嚴記』は「応⁽⁴⁵⁾機根⁽⁴⁶⁾設⁽⁴⁷⁾隨宜法⁽⁴⁸⁾是大聖善巧也十二部經八万法門浅深差別開合不同專依⁽⁴⁹⁾此義⁽⁵⁰⁾也」というように、仏の教えが多様な解釈から成り立っている意義は、一切衆生の人位・行位の異なりの一々に相応するためである、という立場から著し、反対に『選択集』は一言一文に執着し、他を廃すもので、釈文の方軌を逸脱した内容である、と示す意図があったと考えられる。

注

(1) 『明恵上人行状記』下(喜海撰、以下『仮名行状』)

建暦二年壬申秋比、或所ニシテ上人講經說法ノ次ニ選択集ノ中ニ処処ニ一向専修ノ行ヲ立トシテ菩提心ヲ撥去シ、并聖道門ヲモテ群賊ニタトウル義を出シテ、重々ノ難決ヲ設ケ、佛法ノ大宗ニソムケルヨイヲ破ス、其後専修人ナカニ彼集ニスヘテ此義無シ、自ノ僻見ヲ述ルナリト云フ聞ヘアチ、殆ト来聞アルニヨテカノ決答ノタメニ摧邪輪三卷高山寺ニシテ同年十一月廿三日コレヲ撰出畢ヌ(中略)又彼摧邪輪ハ専修人ニ対スル難詰ヲサキトシテ卒尔ニコレヲ草スル間委細ノ析簡コレヲ略スルニヨテ同三年 月 日重テ莊嚴記一卷ヲ作テ彼ノ記中ニ殘ルトコロノ義ヲチリハメ釋ス其後流布セスシテナヲ思惟スルトコロニ子細アルニヨテ同年三月一日始テ現行流布セシムルナリ(高山寺典籍文書綜合調査団編『明恵上人資料』一(高山寺資料叢書第一冊)東京大学出版会、一九七一、四五〜四六頁)。

以上の内容から、『摧邪輪』は建暦二年十一月廿三日に完成し、翌年三月一日、高名なる人に進上され、『莊嚴記』は『摧邪輪』進上の後、同年六月廿二日に完成したことがわかる。

(2) 『摧邪輪』の内容について、箇々の批判を挙げながら全体としての『選択集』に対する批判内容を分析したものに、石田充之「高弁の摧邪輪に示す反論の異義」(『鎌倉浄土教成立の基礎研究』百華苑、一九九六年、一四一〜一八八頁)があり、また「菩提心説」を中心に論じたものに、末木文美士「摧邪輪考」(『日本仏教思想史論考』大蔵出版、一九九三(初出「理想」六〇六、一九八三))がある。書誌については、梶原隆徳「鎌倉時代の摧邪輪写本並に袋中上人筆評摧邪輪に就いて」(『専修学報』三、一九三六)、鎌田茂雄・田中久夫校注「鎌倉旧仏教」

(新装版)岩波書店、一九九五、五一〜五二五頁)、拙稿「六波羅蜜寺所蔵『摧邪輪』について」(高橋弘次先生古希記念論集『浄土学佛教学論叢』(上巻)二〇〇四年、四二九頁)他がある。『莊嚴記』の内容については、前川健一「摧邪輪莊嚴記について」(『印度学仏教学研究』四六一、一九九七)、拙稿『摧邪輪莊嚴記』の一考察―引用典籍を中心に―(『仏教学会紀要』九、二〇〇一)がある。

(3) 川瀬一馬編著『お茶の水図書館蔵 新修成實堂文庫善本書目(財)』石川文庫事業財団 お茶の水図書館、一九九二、一四四頁。

(4) 叡山文庫調査会編著(叡山文庫調査会、二〇〇〇)五〇頁。

(5) 補訂版第三巻、六四三頁。

(6) 鎌田茂雄・田中久夫校注『鎌倉旧仏教』(新装版)岩波書店、一九九五、五一五頁。仁和寺所蔵『摧邪輪』巻下の識語に「享保三年(一五三〇)十一月二十二日 斎怡(仁和寺心蓮院住僧、天正七(一五七九)年寂)」とある。

(7) 佛教大学図書館所蔵本書誌解説参照。大谷大学図書館所蔵本(内宗大一一〇五)、大正大学図書館所蔵本(一五四―四四二―一、一五四―二二一―)、龍谷大学図書館所蔵本(268・2 / 66―W)。

(8) 「方便智院」は明恵の高弟定真(一一七三―一二五〇)の開基である。定真ははじめ「円法房」と名乗り、理明房興然(一二二一―一二〇三(武内孝善編「理明房興然伝記編年史料集」(高野山大学論叢)十八号、一九八三)参照)より密教を受学し、長く高雄に住した後、明恵に師事した。(空達房定真)(奥田勲『明恵―遍歴と夢』(東京大学出版、一九七八)一八三頁参照)。定真の血脈については「明恵上人の血脈(都

賀尾流」ならびに「高山寺代々記」（村上素道「梅尾高山寺明恵上人」梅尾高山寺、一九三二再版）参照。『方便智院聖教目録』は室町時代に作成されたもの（旧目録）が一部残っている。『摧邪輪莊嚴記 一帖』の書名が確認できるのは、この目録を寛永十年に整理し諸目録を加えて再編した『方便智院聖教目録并諸目録』（新目録）においてである。（金水敏「方便智院聖教目録」影印・翻字、解説『明恵上人資料』第四、東京大学出版会、一九九八）。また、奥田勲氏の「高山寺経蔵の室町・江戸時代の典籍について」（『高山寺典籍文書の研究』高山寺典籍文書総合調査団編、東京大学出版会、一九八〇）によれば、新目録において確認できる『摧邪輪莊嚴記』の書名は一部残存の旧目録においても一致しており、奥田氏も「現存本には見えない。成實堂善本書目所載の一帖がこれか。」（一三六頁）とされている。他に、旧目録ならびに新目録の一部図版が『高山寺善本目録』一〇五頁（番号一〇八、一〇九）（高山寺典籍文書総合調査団編、東京大学出版会、一九八八）に掲載され、同書に石塚晴通氏の解説がある。

(9) 「明恵自筆本」とされていたものに、後代異議をとなえた例として、大東急記念文庫『光明真言土沙勸信記』（影印）における川瀬一馬氏の解説がある。そこには

昭和三十一年に本文庫の「貴重所解題第二巻仏書の部」を執筆し、その際改めて本書を検討して、その前に文化財の審定で全巻明恵上人自筆と認められて指定されたものであったが、（中略）訂正加筆のみが明恵の自筆であって、本文は近侍の門弟が師の命により稿補に基づいて清書を行った（中略）ものである。しかしながら明恵自身の著作の底本としての価値は変わらない。

とある。（川瀬一馬監修『明恵上人手訂定稿本光明真言土沙勸信記』財団法人 大東急記念文庫、一九八五年、二一九頁下～二二〇頁上）。

(10) 慈眼堂蔵の寛永三年版（内典／6／301／144）（『摧邪輪』三卷（内典／6／299／142）と共に一部四冊としている）。

(11) 真如蔵の寛永三年版（内典／23／7／739）（『摧邪輪』三卷（内典／23／3／695）と共に一部四冊としている）。

(12) 『鎌倉旧仏教』三六二頁上（以下『摧邪輪』の引用は『鎌倉旧仏教』の頁とその上下のみとす）。

(13) 『鎌倉旧仏教』三六二頁上。

(14) 注（8）参照。

(15) 『浄土宗全書』第八巻、七七四頁上（以下『莊嚴記』の出典は『浄全』とその頁、上下とす）。

(16) 前川氏において既に「三は二の、五は四の、六と七は八の傍論である」こと、また『摧邪輪』「大文第二「聖道門を以て群賊に喩える過失」は論じられていない」等の指摘がなされている（前掲論文）。

(17) 「大方広仏華嚴經搜玄分齊通知方軌」『大正新脩大藏經』（以下『大正蔵』）三五（一七三）十三頁中。

(18) 『鎌倉旧仏教』三二〇頁上。『観無量寿仏經疏』（以下『観經疏』、『大正蔵』三七（一七五三）二六〇頁上）。

(19) 『鎌倉旧仏教』三二〇頁上。『大正蔵』四七（一九六五）一一四頁中。

(20) 『鎌倉旧仏教』三二〇頁下。『卍新纂大日本統蔵經』八、四二七頁中。

(21) 『鎌倉旧仏教』三二〇頁下。『大正蔵』三七（一七五三）

二四八頁中。

- (22) 『鎌倉旧仏教』三二〇頁下。『大正藏』四七(一九五八)七頁中下。

- (23) 『鎌倉旧仏教』三二〇頁下。『大正藏』二六(一五二四)二三二頁下。

- (24) 『鎌倉旧仏教』三二一頁上。『大正藏』二六(一五二二)一三八頁下。

- (25) 『鎌倉旧仏教』三二一頁上。『大正藏』三二(一六五九)五〇九頁中、【参考】「經說」として「親身過患發菩提心思惟諸

仏發菩提心」の文を引用するが、この文は『發菩提心經論』に「親身過患發菩提心」「思惟諸仏發菩提心」を四發心の類例として出す文である。これを「經の一例」として挙げたのは義寂『菩薩戒本疏』(『大正藏』四〇(一八一四)六七五頁中)に「發菩提心經云」として『發菩提心經論』の同箇所が引用されていることに因ると考えられる。

- (26) 『鎌倉旧仏教』三二一頁上。『大正藏』三二(一六六四)五六四頁中。

- (27) 『鎌倉旧仏教』三二一頁上。『大正藏』三二(一六六六)五八〇頁下。

- (28) 『鎌倉旧仏教』三二一頁上。『大正藏』三一(一六一〇)七九四頁上。

- (29) 『鎌倉旧仏教』三二一頁上。『大正藏』三二(一六六一)五四一頁中。同、三二二頁下。同、五四二頁下。

- (30) 『鎌倉旧仏教』三二二頁上。

- (31) 『鎌倉旧仏教』三二二頁上。

- (32) 『鎌倉旧仏教』三二二頁上。

- (33) 『鎌倉旧仏教』三二二頁下。この他、『鎌倉旧仏教』三二五頁

下「淨識乃至無漏心者是菩提心也是故初心行者亦以菩提心一為正因得往生」。三四一頁下「無自性故畢竟真空指此真

空理一名三空所現真如」此真如中有「不空恒沙性功德」此性功德始顯現名「加行因」即是菩提心也。等

- (34) 「無差別」「真性空」等と定義される菩提心は、この後多様に論じられる。

- (35) 『淨全』七七五頁下。

- (36) 『淨全』七七五頁下、七七六頁上。『大乘義章』(『大正藏』四四(一八五一)五六六頁中)より引用。

- (37) 『淨全』七七六頁上。

- (38) 「以自性清淨心不空如来藏」為「菩提心体」。『大正藏』三一(一六二七)八九六頁中。

- (39) 「以第一義空」為「菩提心体」。『大正藏』三三(一六六一)五四一頁中。

- (40) 「以有為願行」為「菩提心体」。『大正藏』三一(一六一〇)七九四頁上。

- (41) 智儼『孔目章』、『大正藏』四五(一八七〇)五四九頁上、中。

- (42) 『淨全』七七七頁下。

- (43) 『摧邪輪』において發心の諸相を説くのは大門第一第四「言双觀經不説菩提心」并言「弥陀一教止住時無菩提心」過である。

- (44) 『大正藏』四七(一九六〇)六八頁上。

- (45) 『鎌倉旧仏教』三二六頁上、下。

- (46) 『淨全』七八一頁下。

- (47) 『大正藏』四七(一九六〇)六八頁中。

- 正藏』三（一五六）一三六頁上（中）をにおける、釈尊の本生譚（地獄において発心したという内容）を引用。（西山厚「明恵の思想構造―釈尊への思慕を核として―」（『佛敎史学研究』二四―一、一九八一）参照）。
- (49) 『鎌倉旧仏敎』三四六頁下。
(50) 『浄全』七八二頁上。
(51) 『浄全』七八二頁上。「此三時或約無学果得不得或約乖靜有無或約三明具不具或約敎行證興廢雖有諸門不同皆同約盛衰不同立始中終義於此能住法体雖有多門敎行證之言皆可総摂之如理思之」
- (52) 『浄全』七八三頁下。「彼三災劫末時舍利神變説法得益（中略）諸法因縁業力境界甚深甚深不可思議不可思議莫作偏執」
- (53) 『鎌倉旧仏敎』三五二頁下。
(54) 『大正藏』十二（三六〇）二七九頁上。
(55) 『鎌倉旧仏敎』三五二頁下。
(56) 『大正藏』十七（八三七）八九五頁上（中）。
(57) 『浄全』七八九頁上。
(58) 『浄全』七八九頁上。
(59) 『浄全』七八九頁上（下）。
(60) 『浄全』七八九頁下。『鎌倉旧仏敎』三五三頁上。『観経疏』の引用は『大正藏』三七（一七五三）二七八頁上。
(61) 『鎌倉旧仏敎』三五三頁下。
(62) 『観経疏』、『大正藏』三七（一七五三）二七八頁上。
(63) 『浄全』七九〇頁上。
(64) 『観無量寿経』、『大正藏』十二（三六五）三四六頁中。
(65) 『鎌倉旧仏敎』三五七頁上。
- (66) 『鎌倉旧仏敎』三五七頁上。
(67) 『浄全』七九〇頁上（下）。
(68) 「初二果」四向四果（聖者の四つの位。小乗仏敎における四つの修行目標と四つの到達境地。預流向、預流果、一来向、一来果、不还向、不还果、阿羅漢向、阿羅漢果）の内、預流果と一来果。（『広説仏敎大辞典』中巻、六四三頁d（東京書籍））
- (69) 『鎌倉旧仏敎』三六一頁上（下）。先ず、『摧邪輪』において「観無量寿仏敎」（以下「観経」）ならびに「観経疏」の対応する三箇所を文証として挙げ、それぞれに明恵自身の解釈を加える。
- ①『観経』（『大正藏』十二（三六五）三四三頁中）作是観者除無量億劫生死之罪於現身中得念仏三昧。『観経疏』（『大正藏』三七（一七五三）二六七頁下）從作是観者下至得念仏三昧已来正明剋念修観現蒙利益。『摧邪輪』解曰剋念修観者は観仏義現蒙利益者指経得念仏三昧文也下結句念言即指観義一言念仏也。
- ②『観経』（『大正藏』十二（三六五）三四三頁中（下））但當憶想令心眼見見此事者即見十方一切諸仏以見諸仏一故名念仏三昧作是観者名観一切仏身。『観経疏』（『大正藏』三七（一七五三）二六八頁上）一明因観得見十方諸仏二明以見諸仏一故結成念仏三昧三明但観一仏即観一切仏身也。『摧邪輪』解曰經文言令心眼見乃至作是観者等者是観仏也言念念仏三昧者即是念仏也疏中言因観得見乃至但観仏等者是観仏也言以見諸仏一故結成念仏三昧者即是念仏三昧也
- ③『観経』（『大正藏』十二（三六五）三四三頁中）念仏衆生撰取不捨。『観経疏』（『大正藏』三七（一七五三）二六八頁上）

衆生願見_レ仏即念_レ念現在「目前」。「摧邪輪」解曰即衆生願見
仏者は念仏也言現在目前等者は観仏也如_レ此作法「已次文出」專
念名号利益乃至結云広願念仏三昧竟云。

このように、『摧邪輪』では、一の「像相観」、二の「真身
観」、三の「近縁」等、すべて観の成就は即ち念の成就である
とし、て観仏三昧と念仏三昧とは異体なしとする。

(70) 『鎌倉旧仏教』三六二頁上。「寄願」他の法に寄せてその浅深
寛狭の分齊を顯す。(『望月仏教大辞典』第一巻、五〇八頁中)

(71) 『選択集』第十二章、『昭和重修法然上人全集』石井教道編、
平楽寺書店、一九七四(以下『選択集』の引用は『昭法全』と
その頁)三四一〜三四二頁。

(72) 『浄全』七九〇頁下〜七九一頁上。『観経』、『大正蔵』十二
(三六五) 三四六頁中。『観経疏』、『大正蔵』三七(一七五三)
二七八頁上。『昭法全』三四二頁。

(73) 『浄全』七九一頁上〜下。

(74) 『浄全』七九一頁下。

(75) 「法位師解釈」は『無量寿経義疏』卷上(古佚)「言下具足
十念」称_中仏名_上者口称心念要須_レ十(中略)亦有_二法一起_一十
念一即是依_二仏名一法一生起_一十念一口称_二十声一念有_二十法一唯
一法也亦有_二念十法一起_一十念一口不_レ称名但起_二十念一(十念、
十声の他に、一つの仏名を、称える回数によって十として合計
三十法とする)(西村岡紹、梯信曉「宇治大納言源隆國編 安
養集 本文と研究」百華苑、一九九六年、八三〜八四頁参照)。

(76) 『昭法全』三二二頁。

(77) 『浄全』七九二頁上。

(78) 「心所」とは、心の属性ともいうべく、心の部分的な作用性
質状態などを指す(水野弘元『仏教用語の基礎知識』春秋社、

一九九六年)。

(79) 「色」とは、肉体又は物質のこと(水野弘元、前掲書)。

(80) 『浄全』七九二頁上。『釈浄土群疑論』(以下『群疑論』)、『大
正蔵』四七(一九六〇) 七六頁下。『選択集』では、『群疑論』
の「称仏」が「念仏」となっている。

(81) 『鎌倉旧仏教』三六一頁下〜三六二頁上。ここでは「俱舍論
云見謂眼根觀照色故」として『俱舍論頌疏論』(『大正蔵』四一
(一八二三) 八二六頁下) が引用される。

(82) 『浄全』七九三頁上。

(83) 『鎌倉旧仏教』三六二頁上。

(84) 『成唯識論』、『大正蔵』三一(一五八五) 二八頁下。

(85) 『浄全』七九三頁下。

(86) 『浄全』七九四頁上。『成唯識論』、『大正蔵』三一(一五八五)
二八頁中〜下。

(87) 『観無量寿経』、『大正蔵』十二(三六五) 三四三頁中。

(88) 『鎌倉旧仏教』三六五頁上。

(89) 『浄全』七九四頁上。

(90) 『菩提資糧論』、『大正蔵』三二(一六六〇) 五一七頁中「菩
提者一切智智故資糧者能滿菩提法故」。同、五二五頁下「此六
波羅蜜總菩提資糧」。

(91) 『浄全』七九四頁上〜下。

(92) 『浄全』七九四頁下。『観経疏』、『大正蔵』三七(一七五三)
二四九頁下。『観念法門』、『大正蔵』四七(一九五八) 二五頁
上。『安樂集』、『大正蔵』四七(一九五八) 十六頁中。

(93) 『浄全』七九五頁上。

(94) 『浄全』七九五頁下。『鎌倉旧仏教』三七〇頁下。

(95) 『鎌倉旧仏教』三七〇頁下。

- (96) 『鎌倉旧仏教』三七〇頁下。「念仏衆生撰取不捨」は『観經』、『大正藏』十一(三六五)三四三頁中。
- (97) 『浄全』七九五頁下、七九六頁上。
- (98) 『浄全』七九六頁上、下。
- (99) 『觀經疏』光之体用即無漏為「体」、『大正藏』三七(一七五三)二六九頁上。『觀念法門』「但有専念阿弥陀仏衆生」彼仏心光常照「是人」撰護不捨、『大正藏』四七(一九五九)二五頁中。
- (100) 『浄全』七九六頁下(『鎌倉旧仏教』三七〇頁下)。
- (101) 『鎌倉旧仏教』三六九頁上。
- (102) 『鎌倉旧仏教』三六九頁下。「三縁の義」は『觀經疏』、『大正藏』三七(一七五三)三六八頁上。
- (103) 『鎌倉旧仏教』三六六頁上。
- (104) 『鎌倉旧仏教』三六八頁上。
- (105) 『鎌倉旧仏教』三六九頁上。
- (106) 『浄全』七九六頁下、七九七頁上。
- (107) 『昭法全』三二七頁。
- (108) 『浄全』七九七頁下、七九八頁下。
- (109) 『大正藏』十(二七九)二〇五頁中、下。
- (110) 『大正藏』十(二七九)二〇五頁下。
- (111) 『大正藏』九(二七八)四三七頁中。
- (112) 『昭法全』三一八頁。
- (113) 『浄全』七九九頁上。
- (114) 『浄全』七九九頁下。
- (115) 『鎌倉旧仏教』三七三頁下。
- (116) 『正新纂大日本統藏經』五八(一〇〇四)四二五頁中。
- (117) 『浄全』八〇一頁下、八〇二頁上。

- (118) 『浄全』八〇〇頁下、八〇一頁上。
- (119) 「二宗」。法相宗(相宗、八宗中の法相宗に当たる)と法性宗(性宗、八宗中の三論宗に当たる)。(織田得能著『織田仏教大辞典』(新訂重版)大蔵出版、二〇〇〇年、一三二七頁)。
- (120) 本書における引用典籍の出典については、既に以下の研究成果がある。『巻上』鎌田茂雄・田中久夫校注『鎌倉旧仏教』(岩波書店、(新装版、一九九五)、『巻中』・『巻下』末木文美士『摧邪輪』巻中・巻下引用出典注記「(佛教文化」十七、一九八四)。
- (121) 『鎌倉旧仏教』三一七頁下。
- (122) 『鎌倉旧仏教』三二八頁下。
- (123) 前川氏、前掲論文、拙稿『「摧邪輪莊嚴記」の一考察―引用典籍を中心に―』(『仏教学会紀要』九、二〇〇二)、参照。
- (124) 『鎌倉旧仏教』三八五頁上。

〔附記〕この度調査させて頂きました(財)石川文化事業財団お茶の水図書館成實堂文庫古文書古書籍部門、叡山文庫、佛教大学図書館の皆様のご厚情に、心より深く感謝申し上げます。